

【2023 年度事業報告】

1. オルタナティブ教育研究・推進事業

(1) フリースクール事業

佐藤真一郎

前年度に引き続き、日常的な来所者が増加した。自主事業のフリースペースコスモだけでなく、委託事業の「居場所ぱれっと」「むさしのクレスコーレ」も委託開始から一定期間が経過し、子どもたちの成長と学びを支える「場の力」が成熟してきたことが要因だと考えられる。それに伴い、各事業所とも利用者の「やりたいこと」を中心に置いた「居場所の学び」が多様に展開された。

| 子ども年齢 | |
|--|---|
| 事業計画 | 事業実施の報告/成果 |
| ① 居場所に内包された「協同の学び」の言語化 ・コスモパンフ改定 ・FS 部会開催(3 回程度) ② 公民連携のあり方追求 ・各事業行政会議 ・東京都公民連携会議 ・東京都フリースクール等ネットワーク (TFN) 会議 ③ 保護者との協同 | ① 3 所登録者数合計：75 名 (2024.3 現在) ←66 名 3 所新規相談件数合計：90 名←72 件 3 所新規登録者数：30 名←28 名 3 所延べ利用者数：6,518 名←5,535 名 パンフ改定は完了。部会の開催も 2 回に留まった。 ② 各事業所の連携会議に加えて、東京都の連携会議、TFN の定例会議に参加。TFN として都の教育庁への訪問 (こども未来アクション 2024 についてのヒアリング) を実施。日本共産党 (10 月) からのヒアリング。三鷹市教育委員会生活指導部会学習会講師 (11 月) 都民連児童福祉部会講師 (2 月) JDEC (日本フリースクール大会) にて報告 (3 月) ③ 3 事業所で親の会を開催。 |
| フリースペース コスモ (自主事業) | |
| 事業計画 | 事業実施の報告/成果 |
| ① 居場所事業の実施 ② 米づくり農業体験、夏の冒険旅行等の特別活動の実施 ③ 学習センターとの協同 (基礎学力) ④ 実践の言語化 (パンフ作りを通じて) ⑤ 保護者とスタッフの協同 ※ 30 周年記念行事 | ① 1 日の平均来所者の増加傾向 (約 20 名) は続くも新規入会者は減少 会員数：27 名 (2024.3 現在) ←28 名 新規相談件数：54 件←61 名 (23 年度報告から修正) 新規入会者数：5 名←10 名 延べ利用者数：3,491 名←3,348 名 自治的な活動づくりをベースに小学校低学年から高校 1 年生年代まで活動づくりを行った。食事作りや学習クラブ、平和ゼミ、特別活動の準備・報告等、メンバー主体の活動は充実。一方で新規入会者数は減少。 ② 米作り農業体験 (通年/長野県)、冒険旅行 (8 月/富士山)、電車旅 (8 月/青森ねぶた祭) に加え、沖縄スタディーツアー (10 月/沖縄) を実施。プログラムの計画から報告会、報告集作成までをメンバー主体で取り組んだ。 ③ 「学びタイム」はコスモスタッフが担当。週に 2 回。一方で学習センターとのスキー合宿の合同、コスモメンバーの学習センター入会など、連携の機会が増えてきている。 ④ パンフレット改訂、パンフ改訂に伴いホームページも改訂した。 ⑤ 「コスモ親の会」「保護者会」の保護者主導継続。保護者自身の交流の場 (オヤ☆コス) となっている。「親の会」では自主学習会を開催 (2 回)。在住地域での親の会立ち上げを行った保護者もいる。 |

| | |
|--|---|
| | <p>課題：利用者の多様化に対応した学習活動の充実化、フリースクールを認知してもらう活動（公民連携、地域）、低年齢化への対応、会員数増加によるスペースの狭さ対策、職員体制の強化（ボランティア活用含む）等、23年度課題は継続。</p> <p>※ 設立から30年を迎えたフリースペースコスモ。巣立ったメンバーが実行委員会を立ち上げ、2月3日には30周年記念同窓会が開催され30名ほどのメンバーが集まり旧交を温めるとともに、場づくりと学びづくりの文化が現在に至るまで引き継がれていることを喜びあった。</p> |
|--|---|

居場所ぱれっと（委託事業）

| 事業計画 | 事業実施の報告/成果 |
|--|---|
| <p>① 居場所事業実施</p> <p>② 地域資源を活用した学びの機会作り</p> <p>③ 保護者が安心できる相談の場、子どもの学びをスタッフと協同して考えられる保護者会の運営</p> <p>④ 公民連携パートナーシップのあり方模索</p> | <p>① 全体的に増加傾向</p> <p>利用登録者数：19名（2024.3現在）←17名 新規相談件数：5件←7件 新規登録者数：4名←6名 延べ利用者数：1,588名←1,355名 夏のキャンプや「ぱれっとカフェ」などメンバー主体の活動が充実した。その充実の様子は一年を締めくくる「節目の会」でいきいきと報告するメンバーの表情が物語っていた。</p> <p>② メンバーの興味関心を国際交流 NGO、自然活動 NPO や地域ボランティアセンターと連携して学びプログラムへと繋げた。料理企画「世界の料理」ではボランティアセンター経由で様々な国々のゲストと共に活動。メンバーの学びを支える地域ネットワークが年々広がっている。</p> <p>③ 親の会、進路説明会の対面実施を再開。保護者間の関係性づくりにも貢献できた。</p> <p>④ メンバー主体の企画「ぱれっとカフェ」や修了式にあたる「節目の会」（ぱれっとでは学習成果報告会も兼ねている）に行政関係者にも保護者、地域協力団体と共に参加。練馬地域の子育て団体のネットワーク組織「こどもまんなかネットねりま」の立ち上げにも参加した。</p> <p>課題：区の仕組み上、新規相談者数が伸びない。一方で区の不登校者は増加していることから、「つなぎの仕組み」に関して担当課との協議が必要。</p> |

むさしのクレスコーレ（委託事業）

| 事業計画 | 事業実施の報告/成果 |
|---|---|
| <p>① 居場所事業実施</p> <p>② 子ども期から若者期まで継続的に支援を行える仕組みづくり</p> <p>③ 公民連携のパートナーシップのあり方を模索</p> | <p>① 前年に続き1日の平均来所者数が増加。延べ利用者数に顕著。</p> <p>利用登録者数：29名（2024.3現在）←21名 新規相談件数：31件←26件 新規登録者数：21名←12名 延べ利用者数：1439名←832名 開設から4年目が経過し、「言葉にして振り返る習慣」「自分の意見を言っても受け止められる安心感」など場の力が醸成されてきている。利用者数の増加はその表れである。加えて、今年度は地域就農の若い農家の方や環境 NPO、市立の社会教育施設活用など学びのフィールドを地域に広げる活動に取り組んだ。年末の終了式「節目の会」では「好きなものはクレスコーレ」とメンバーが自己紹介していた。</p> <p>② 高校進学後も「みらいる」にケースを引き継ぐことで継続的に支援を行っていく仕組みづくりも継続。その成果として「クレスコーレ」</p> |

| | |
|---|--|
| | <p>レ」から高校進学した生徒が「みらいる」で進路相談、その後大学進学に繋がったケースが生まれている。</p> <p>③ 教育委員会主催の「クレスコーレ」の報告会議（隔月）、不登校対策会議（隔月）に出席。中学3年生の入室が多いこと、困難ケースが多いこともあり、在籍校、SSW（スクールソーシャルワーカー：市）との連携や進学先の高校、YSW（ユースソーシャルワーカー）との連携、こども家庭支援センター、児童相談所など関係諸機関との連携などソーシャルワーク的な業務が増えている。</p> <p>課題：利用者数、活動内容に対して居場所スペースが手狭になってきている。</p> |
| その他の事業 | |
| <p>① ひとり親家庭訪問型学習・生活支援事業(武蔵野市委託事業)</p> <p>1) 訪問対象者：15名（前年度15名）。</p> <p>2) 週1回約2時間の訪問活動を実施。</p> <p>3) 学校の学習に合わせた学習支援を行う。 不登校児の場合には、本人の興味に合わせた教材を使っての学習支援。 同時に、家族以外の人間との関わりを持つ。 さらに学校等関係機関とのカンファレンスに参加し、本人および家庭状況を共有。</p> <p>② 生活困窮者子どもの学習等支援事業（三鷹市委託事業）</p> <p>1) 登録者数：39名(学習支援・不登校支援・若者支援)のうち新規登録11名</p> <p>2) 高校受験合格者数：6名(高校生年齢での受験者も含む)</p> <p>3) 大学・専門学校合格者数：2名</p> <p>4) 就労者数：1名</p> <p>高校中退対策として高校1年生年齢に対する転学支援も行った。 困難な状況におかれる子どもの増加に伴い、三鷹市子ども家庭支援センターや、子ども子育て支援課との連携強化をはかった。 夏合宿(8月/相模原)、受験生を励ます会(12月)、進級・進学を祝う会(3月)、スキー合宿(3月/長野)を実施した。</p> | |

(2) 十代後半の社会的課題に取り組む事業

藤井智

「十代後半課題」は、社会全体の若者課題ともかかわって、法人の取り組む重点テーマとなっている。法人の運動としては、「コスモ高等部」事業がこの課題への牽引的な役割を期待されている。

「思春期課題をその時期に、青年期課題を青年期に」先送りすることなくしっかりと取り組み、達成していくことを目指して、その実質をつくっていくことが、強く求められている。

| フリースクール コスモ高等部（自主事業） | |
|---|---|
| 事業計画 | 事業実施の報告/成果 |
| <p>① 実践とプログラムの充実</p> <p>② 運動の基盤の拡大、会員獲得</p> <p>③ 諸団体との連携や協同</p> | <p>① 高等部メンバーの少なさから、「個人」に左右されながらも、学習プログラムに進展がみられ、メンバーたちの「共同的な学び」とプログラム相互の関係性が強まった1年だったといえる。</p> <p>1) 権利としてのキャリア教育「ワカレポ」の展開</p> <p>2) シチズンシップを獲得する「そもそも講座」の展開</p> <p>3) 総合的・自治的取組としての「スタディツアー」と「活動交流展示会」の「定番化」</p> <p>4) ソーシャルファーム事業とのコラボで進む「デザイン講座」</p> <p>5) 展示会やトーク・報告冊子の作成などの「作品化」</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>以上を、メンバー一人ひとりの切実な学習課題や問題関心を掘り起こし、共有し、カタチにしながらか展開してきた。</p> <p>② 2023年度は最終的に「正会員」5名、「プログラム利用会員」8名、「つながり会員」2名だった。うち5名がそれぞれの進路に向けて「卒業」していった。</p> <p>1) 会員制度の整備(プログラム利用会員・つながり会員の 신설)により、会員数も拡大し(22年度当初は7名だった)、学習活動も安定した。</p> <p>2) 24年度に向け、法人義務教育事業からまずは1名の高等部進学。「内部」からの会員獲得は重要課題だが、緒についたばかり。</p> <p>3) 「三鷹ひきこもり合同相談会」や「東京親の会」等からの問合わせは、拡大傾向にあるが、まだ具体的な「入会」には至っていない。</p> <p>③ 連携・協同は以下の3つに集中的に取り組んだ。</p> <p>1) 義務教育終了後の課題をテーマにした「923 フォーラム」の実行。三鷹・調布の5団体による「実行委員会」と、武蔵野・狛江の行政機関によるバックアップにより、100名を超えるフォーラムを実施。報告パンフも作成し、活用。この課題をローカルな運動として、諸団体・機関の協同で進めた。引き続き運動の進展が求められる。</p> <p>2) 学校外学修の単位認定制度利用にかかわる動き。丁寧な教育活動で定評のある広域通信制高校との協議が始まった。当該通信制高校は、品川のエルムアカデミーとも関係があり、エルムとの共同歩調で今後も進めていきたい。</p> <p>3) 関係諸団体・事業との丁寧なかかわり。三鷹ひきこもり合同相談会(とくにここに参加する「親の会」には不登校状態の若年者の保護者も多く集いはじめている)、東京親の会関係諸団体、その他親の会や法人内の諸事業への、折を見た訪問や参加を可能な限り行うことで、十代後半課題への問題意識が形になり、「コスモ高等部」だけではない法人の(委託を含めた)諸事業によっても、我々の先進性が認識されるようになってきていると言える。</p> |
| <p>その他、十代後半課題にかかわる活動</p> | |
| <p>以下の事業も、義務教育終了後の若者を対象とした学習・教育運動としてとらえられる。</p> <p>① 武蔵野市若者サポート事業「みらいる」 義務教育終了年齢から18歳までを主な対象とした事業。 →詳細は「武蔵野事業部」の項</p> <p>② 武蔵野市委託事業「中高生世代ワークショップ Teens ムサカツ」 従来市によって運営されてきた本事業は2023年度より委託事業となり、我々が請け負った。市の施策に関する当事者である中高生世代の「提言」をまとめる事等、ワークショップ型の事業として実施された。事業最終盤では市長や教育長も参加する「発表会」がひらかれた。若者世代のシチズンシップ教育としても意義深い取組だった。</p> <p>③ 中野区若者フリースペース事業「まごころドーナッツ」 対象年齢は義務教育終了から30代いっぱいだが、青年前期の課題も多く寄せられている。 →詳細は別項</p> <p>④ 相模原、西東京、練馬で受託する「生活困窮者自立支援事業」に関わる「居場所」 対象年齢は様々だが、相模原市「西門ホッとスペースコロレ」をはじめ「十代後半課題」が活動の中心テーマになってきている。</p> | |

→詳細はそれぞれの項目参照

- ⑤ 三鷹市西多世代交流センター（旧西児童館）「ユースタイム7」事業
「中学生・高校生・若者世代のための時間」として我々が受託している。
- ⑥ 各事業に付随する「校内居場所カフェ」等の取組
- ⑦ 練馬事業部「プラネットZ」の取組
事業委託の枠を超えて、義務教育を終了した年代が集い・出会い・活動する場として始めた。

2023年度は、それぞれの事業部で工夫をして進められてきたが、2024年度は、それぞれの取組を集約し、実践的な知見を共有し、法人として統一的にすすめていく必要がある。

(3) ソーシャルファーム事業

高橋薫

働くことを学ぶ場づくりに挑戦して20年が経過した。顔の見える関係に支えられる地域連帯経済をベースに取り組みを展開していくと同時に、それを支える制度や仕組みの構築をすすめることで、新たな働き方実践モデルの提示を展望している。働き方を学ぶ、オルタナティブ教育事業の資源としても位置付けている。

| 事業部全体 | |
|---|---|
| 事業計画 | 事業実施の成果 |
| <p>① 「風のすみか」および「風のすみか農場」の展望 小麦を中心とした自家生産と三鷹武蔵野地域でのパン販売を行い、働きながら生き方・働き方を学ぶ生産学校としての機能の開発を追求。</p> <p>② 「すみかふえ」の展開 2年目を迎えている、三鷹駅前商店街の一角にある量り売りとシェアキッチンのお店「野の」を活用した若者が運営するcafeの取り組み。</p> <p>③ 「DTP ユースラボ」の他事業所との連携による共同受注制度の構築 若者による職場づくりが、競争ではなく協同の働き方・地域づくりにつながる可能性を追求。常勤1人、非常勤3人でPCを活用した発信媒体の制作を行う。東京都ソーシャルファーム事業所認定助成制度を活用。</p> <p>④ 社会的連帯経済の推進 信頼と協力により地域の連帯性を深め一般競争市場とは別の経済をつくることで活動を持続可能なものにしていくための取り組み。</p> <p>⑤ 東京都および基礎自治体に対する優先発注制度への提案 ユースラボへの優先発注を制度化する</p> | <p>① 本年度も、ベーカリー、農場ともに一定規模での生産加工を実現した。風のすみかは、立ち上げから20年が経過し、近隣の保育園をはじめ市役所や高齢者施設など、地域へのパンの提供を継続している。また、いずれもサポステ事業の集中訓練プログラムを活用して若者を受け入れた。「風のすみか」4人、「風のすみか農場」13人。</p> <p>② 「風のすみか」アルバイト・研修生の若者が毎週水曜日にcafeを実施した。若者が地域のつながりのなかで働く現場ということで、関心をもって来店される方も多い。④のネットワークにも参加しながら、地域の顔の見える関係を深めた。</p> <p>③ 協同ネットが広げてきた関係から案件の依頼を受け、話し合いで仕事の内容や役割分担などを決めて作品を返していくというプロセスで仕事を進めている。作業に余裕を持たせるためにも、他事業との連携も視野に取り組んできた。創造集団440Hz（フリースクールの延長線上に若者が立ち上げたデザイン工房）、新潟ワーカーズコープとの交流を持ちつつ、共同受注についての意見交換を行った。</p> <p>④ 市民塾「コモンズ in みたか・むさしの」、「まちづくり講座」などを展開してきたが、これらを統一し「みたか・むさしの協同コミュニティづくりネットワーク」が立ち上がった。三鷹武蔵野を中心とした地域の現状を知り、新たな価値と出会い、連携し動き出すことを志向する学習会・交流会を実施し、協同労働を志向する個人・団体のネットワークの相談・設立支援す</p> |

| | |
|--|--|
| <p>ことで、実質的なソーシャルファーム事業の持続可能な基盤づくりを図る。</p> <p>⑥ 義務教育後の社会教育プログラムの開発</p> <p>とりわけ、コスモ高等部とDTPユースラボの連携による「デザインプログラム」を追求。単位所得のできるカリキュラム構築を追求する。</p> | <p>るもの。ワーカーズコープ、量り売りの店「野の」、協同ネットや地域住民が中心となっている。</p> <p>⑤ 連携企業および近隣自治体との連携による受注の安定化が進んだ。団体事業の発信媒体、光陽メディアをはじめとする連携企業からの定期の案件に加え、恒例となりつつある近隣自治体（4自治体7部署）からの発注や、地域のNPOの委託事業の発信媒体、地域の中学校のPTAからの発注があった。売上額も650万円を超え、人件費を上回った。東京都ソーシャルファーム事業所認定助成も活用して運営することができた。</p> <p>⑥ 高等部デザインプログラムを実施。高等部報告参照。</p> |
|--|--|

2. 武蔵野エリア

高橋薫／丸山直理

武蔵野市・三鷹市・西東京市を一体的に捉え、各自治体、専門機関・団体、そして市民とのパートナーシップを構築していくことで、子どもから若者への移行支援システムをつくっていくことを構想している。

| 事業計画 | 事業実施の成果 |
|--|---|
| 武蔵野事業 | |
| <p>① 移行支援システム構築へ向けた、行政とのより密な連携実践の追求と、広域連携へ向けた具体的取り組み</p> <p>② 「若者が育ちあう居場所実践」の発信力を強める</p> | <p>① 関係各課との連携会議を密に行った。また、西東京市地域共生課の学習会に武蔵野市生活福祉課の職員と参加したり、家族セミナーに西東京市の職員が参加したりと自治体間の交流も始まった。</p> <p>【武蔵野市行政、市内支援機関との会議実績】</p> <p>武蔵野市支援調整会議：年6回、武蔵野市精神保健福祉連絡会：年4回、武蔵野市精神保健福祉研修会：年2回、武蔵野市障害者就労支援ネットワーク会議：年3回、武蔵野市若者サポート推進連絡会議：年2回、武蔵野市児童青少年課担当者会議：年12回、武蔵野市生活福祉課担当者会議：年12回、武蔵野市子育て支援ネットワーク実務者連絡会議：年1回、若者サポート事業にかかる実務者連絡会：年1回、子ども・コミュニティ食堂及び子ども学習・生活支援合同ネットワーク連絡会：年2回、むさしの相談ネットワーク年4回</p> <p>【武蔵野市行政職員向け『それいゆ・みらいる・むさしのサポステ説明会・見学会』開催】</p> <p>説明会（年3回）：参加者39名、見学会（年5回）参加者37名 各居場所の連携…クレスコーレとの連携など、同じ場所でやっていることの意味が見えるようになってきた。</p> <p>【クレスコーレ～みらいる】</p> <p>みらいる23年度新規登録者22名（内クレスコーレ登録者：11名）</p> <p>【みらいる～サポステ】</p> <p>みらいる23年度サポステ実施プログラム参加者：のべ113名 というように、クレスコーレ登録者がみらいるへつながり、みらいるからサポステにつながるルートが色濃く数字として表れるようになった。</p> <p>上記『それいゆ・みらいる・むさしのサポステ説明会・見学会』</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>を行政職員に向け実施することで、改めて『クレスコーレ→みらいる→それいゆ→むさしのサポステ』と切れ目のない支援システムを構築していることを改めて認識してもらう機会となった。</p> <p>武蔵野市内『こびと農園』でのインタビュー、武蔵野市中道通り商店会主催の『なかよし祭り』や武蔵野市商工会主催の『七福神めぐり』において各居場所の若者がともに参加した取り組みの発信については、みらいる『Facebook』、武蔵野エリア『Facebook』、『ダイレクトメール』『Instagram』等複数の SNS 等を活用し発信を行った。</p> <p>① むさしの地域若者サポートステーション ② 武蔵野市ひきこもりサポート事業それいゆ ③ 武蔵野市若者サポート事業みらいる</p> <p>実人数 569 人、総利用件数 5467 件、就職等率 77.3%</p> |
| ユースジョブワークショップ | |
| <p>① 地域ネットワークづくり～地域の顔の見えるつながりづくりと教育活動の発信 ② ソーシャルファーム事業の活用 ③ 若者を支え・育てるネットワークづくり</p> | <p>① 吉祥寺中道通り商店街での「なかよしまつり」や武蔵野市商工会議所主催の「七福神めぐり」に若者と共に参加した。若者と地域のまちづくりに取り組む方々との協働の場として定着しつつある。武蔵野市ひきこもりサポート事業フォーラムでは、「わたしが出会えた福祉のしごと」と題して地域の福祉事業で働く若者が登壇。孤立状態からさまざまな出会い・学びを経て福祉現場につながった体験を報告した。また、福祉事業所からも学び合いの場としての福祉現場の可能性について希望が語られた。</p> <p>② 若者の交流スペース「リンク」のプログラム「となりのパン屋」を継続し、個人宅や高齢者施設でのパン販売に若者たちがかかわった。また、「風のすみか」での集中訓練プログラムを通して、新たに「すみかふえ」に参加する若者がいた。さらに、「協同コミュニティづくりネットワーク」（「ソーシャルファーム事業報告」参照）にも参加した若者もいた。</p> <p>DTP ユースラボでは、引き続き高等部との連携により高校生向けのデザインプログラムを実施した。また、ねりまサポステから職場見学の受け入れも行った。</p> <p>③ ねりまサポステで関係構築してきた「光荣商事」にはむさしのサポステからの参加もあり、両サポステの企画として「光荣商事」で働く若者の交流会を実施し、7名の若者が参加した。仕事について考えていることやこれからについてなど、他のメンバーの考えに触れ、お互いに大いに刺激を受けていた。</p> |
| 西東京事業 | |
| <p>地域ネットワークと広域連携構築</p> | <p>中3から29歳の居場所「We」のメンバーの「むさしのサポステ」「リンク」の活用、「西久保保育園（武蔵野市）」や「光荣商事（練馬区）」へのアルバイト参加が活発になった。地元自治体だけでなく、他自治体の連携先につながるができるのは、普段から各地域で協同ネットに参加する若者たちが活動しており、そうした関係がスタッフを通して可視化されていることがあると思われる。</p> <p>また、地域共生課（「We」の担当課）、社会福祉協議会、やまて福祉会（就労準備支援実施）の有志で政策提案や市民との協同を志向した「自主勉強会」を立ち上げた。初回は「若者」をテーマに協同ネットの取り組みを紹介し、2回目は「就労支援」をテーマにゲストを招き</p> |

交流した。武蔵野市生活福祉課、武蔵野サポステ職員も参加し、広域連携についての情報交換も行った。

3. 練馬エリア

大内佳和

「子どもから若者まで切れ目ない支援」を目標に、地域教育から就労までを支える練馬区での支援基盤を確立する。練馬区各地のあらゆる世代のための居場所が連携し、それに行政、関係機関、学校、企業との共同体制を築くことにより、地域教育から就労までを支えるしくみを構築する。

| 事業部全体 | |
|---|---|
| 事業計画 | 事業実施の成果 |
| <p>① 地域教育から就労までを支える練馬区での支援基盤の確立</p> <p>② 社会へのわたりを支える青年期の学び</p> <p>③ 練馬区内の子ども・若者支援団体とネットワークづくり</p> | <p>① 練馬区域で学校外での子ども・青年期の学びの場づくり、福祉的ニーズの高い家庭に対してのアウトリーチ、若者就労支援を、練馬区および厚生労働省からの委託を受けて事業展開した。区役所の各担当課をはじめとする公的機関、教育機関、福祉機関と積極的に関係づくりを行い、これまでに築かれていた支援基盤のさらなる強化を行うことができた。</p> <p>さらに、練馬事業の各事業の連携会議を通じて、居場所間のネットワークの促進や各事業が保持する資源の相互活用を行うように努めた。その結果、各事業のスタッフが他事業での資源を理解し活用できる体制は整った。しかしながら、すべての居場所の子どもたち・若者たちが練馬事業の他資源を積極的に活用するまでは至らなかったと考えている。今後とも各事業の連携体制を強固にしていき、そこで生まれた成果を地域にフィードバックし、練馬区の若者支援ネットワークの形成につなげていく。</p> <p>② 10代後半から20代前半の若者たちの居場所として、「プラネットZ」を定期的に11回開催した。来ているメンバーの多くは人と関わりたい気持ちを持ちながら、人と仲間関係を作る事に躓きを抱えていた。</p> <p>今年度はメンバーが自治的にやりたいことを挙げるミーティングから活動が始まった。皆の前で意見を言うことに不安を抱え、案を出すだけでも精一杯なメンバーが、カラオケに行きたいという案で盛り上がり、場所や値段を調べながら笑顔で話す姿が見られた。まさに、今までやれなかった青春をもう一度体験したいのさと感じさせられた瞬間だった。</p> <p>実現したカラオケ企画では、不安度が高いため歌うところから挑戦が始まっていたメンバーもいた。しかし、周りのメンバーたちが安心感を作ってくれたことで、ようやく自分の歌いたかった歌を歌えるようになり、少しずつ自己表現が出来るようになっていった。このような経験から、この場所が安心できる場所であると分かり、不安感を抱えながら参加していたメンバーも安定して参加できるようになっていった。</p> <p>11月には、上半期の状況を受けてスタッフ会議を行った。メンバー間に場や他のメンバーへの安心感が積み重なってきていたが、まだまだメンバー同士が自主的に意見をまとめるにはハードルがあると、スタッフは感じていた。そこで、現在のメンバー達の状況を</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>理解し、メンバーのニーズに合った企画やスタッフの関わり方を再考した。</p> <p>12月にはグラタンを調理するクリスマス企画を開催した。みんなで一つのものを作るという調理企画では、周りへの気遣いが上手だが、皆の前に出ていくことが苦手なメンバーが、自分の得意な調理の経験を活かして全体の活動を引っ張る姿も見られた。</p> <p>3月には、調理とカラオケのミックス企画を開催した。全体に合わせる事が苦手なメンバーも多くいたが、それぞれが自分なりに関わり合い、共同作業を楽しんでいた。また、メンバー間に皆と一緒にこの時間を楽しみたい気持ちが表れており、最後は上手い下手に関わらず皆で合唱曲を歌い笑顔で終わることが出来た。</p> <p>課題としては、自分から人と自由に関わる事が難しかったり、人との距離感を上手く取れず一方的な関わりになってしまったりする様子がまだまだ見られることである。だが、人と関わる事の楽しさや、自分の事を表現してもいいという安心感を持てる場として「プラネットZ」が機能していると感じられる。あるメンバーは自分のペースを人のペースに合わせられないため、誰かと一緒にどこかに遊びに行くという経験ができなかった。しかし、「プラネットZ」での経験から人と関わる楽しさを持てるようになり、「居場所に来ているメンバーと一緒に映画に行けた。本当に楽しかった。」とスタッフに伝えてくれた。</p> <p>今後も、これまで以上にメンバーたちの思いに沿った場や関係性を構築し、活動の場を広げ地域との関わりを持てるような会を共に作っていく。</p> <p>③ 公共機関を中心とする子ども・若者支援団体との関係性は、2023年度も個別のケースでの協力が多く、その意味での協力体制はさらに強化することができたと考えている。その上で、各機関との共同会議などに積極的に参加することで連携体制を深めることができた。</p> <p>また、若者サポートステーションにおいては、練馬区内の企業や事業所との交流を積極的に行い、就労目的だけではなく若者たちの学びの場と環境を地域に作るための協力を呼び掛けた。その結果、ボランティアの開催、地域行事への参加が積極的に行われ、それらを通じ、若者たちが地域の方々と交流する中から社会参加への自信を身につけ、就労などの自立に向かっていく様子が見られた。</p> |
|--|--|

2023 年度実績

① 子どもの居場所づくり支援事業（訪問支援＋居場所支援拠点アンサンブル）

実人数 156 人、訪問件数 762 回 面接件数 880 回 電話相談件数 3759 回

同行件数 430 回関係機関共有・連携件数 2096 回 アンサンブル総利用件数 2753 件

② ねりま若者サポートステーション

実人数 320 人、総利用件数 3603 件、就職等率 69.3%

③ 若者自立支援事業「居場所」

実人数 79 人、総利用件数 2184 件

4. 相模原エリア

雨宮健一郎／矢盛晶

相模原エリアが数年前から追及し続けている「内側の進路を育む場づくり」は各拠点に集う若者たちに着実に浸透してきている。それを裏付けるように昨年度も「このみんなとだったらなんでも挑戦できるって思える勇気をもたらえる場」「今の自分なら人と関われるんじゃないかって思えるようになった自信をつけられる場」「自分のネガティブなところとか苦手なものを無視して笑顔になれる場」などさまざまな言葉で語られた。

サポートステーションでは集中訓練プログラムに前後期併せて13名が参加し、仲間同士でともに刺激し合いながらそれぞれの目標である「はたらく」へ繋がっていく姿が見られた。

しかしまだまだ出会う必要がある若者たちと出会い切れていない。そして若者たちの置かれている状況を理解し温かく迎え入れてくれる地域社会との連携も構築しきれていない。更なる豊かな地域ネットワークの構築が急務であると感じざるを得ない実情がある。

| 居場所／勉強会事業の展開 | |
|--|--|
| 事業計画 | 事業実施の成果 |
| ① より地域に根差す活動を目指す ② 地域ネットワークを構築するための「居場所サミット」の実施 | ① 昨年度はコロナ禍も落ち着いてきたこともあり、各地域の催事等が再開された。そこを若者たちの社会体験の場、そして地域との協同の場と位置付け積極的に参加した。さらに全拠点がそれぞれ報告会等を実施し、地域ベースで連携している行政や関係機関、そして地域の方々へ私たちの活動の意義をより理解して頂ける機会となった。このような取り組みを経て、地域ごとの切れ目のない支援体制構築が進んだ。また、各区単位での勉強会及び居場所事業の重なりも意識し、合同でのイベントなどを通して勉強会の生徒たちにとっても気軽に立ち寄れる場としての機能も強化された。 ② 地域ネットワーク構築の一つのモデルとして、居場所 कोरोレでは『若者を中心とした地域を結び直すコミュニティづくり』をコンセプトとした取り組みである कोरोレサミットを2回実施した。そこには कोरोレメンバーとスタッフ、勉強会ボランティア OB や現役ボランティアだけでなく、行政職員、学校長、大学教授、そして地域の方々という立場を超えた参加者が延べ56人参加した。若者のリアルな声を聴く機会がより現代の若者を取り巻く学校の現状や社会問題への気づきとなり理解が深まった。さらにはともに活動をすることによって、『みんなで कोरोレを支える』という意識も参加者の皆さんに芽生えたと感じられた。これは私たちだけでなく、関わるさまざまな立場の人たちが若者を支える重層的支援体制の小さなモデルだと考えている。 若者自立サポート事業 実利用者数：558名 延べ利用者数：9401人 子ども健全育成事業 実利用者数：46名 延べ利用者数：694人 |
| さがみはら若者サポートステーションの展開 | |
| 事業計画 | 事業実施の成果 |
| ① 共生と自治の地域づくりの実現 ② 地域のハブ機能の強化から居場所をより拡充して | ① 橋本商店街協同組合との連携は年々密になっており、奈良県主催の講演会で地域連携について登壇を依頼されるなど先駆的なモデルとして広がっている。 今年度は、「集中訓練プログラム」をより地域のネットワークと密に繋がるプログラムに一新した。地域のボランティア活動への日常的な参画とお |

| | |
|----|---|
| いく | <p>祭りでの出店体験、地元企業への1週間の職場体験を経て、地域と若者が対話を重ねて相互理解を深めた。その中で、スタッフを介さずに若者が地元企業に出入りする姿や職場体験を経て仕事を紹介され就労へとつながる若者も増えている。「居場所ホッと」とニローネを起点として、居場所と地域を行ったり来たりしながら、地域の中での出口支援をより拡大した。ただ、密につながる地元企業への若者理解は深まっているが、地域全体としての雇用や教育に対する課題意識はまだまだ乏しい。今後も、地域と若者がともに関わり合い共生関係を紡いでいく場の創設が必要不可欠だ。</p> <p>② 入口機能は従来のサポステ説明会の実施場所を拡大し、町田市やハローワークで定期的な開催をした。ハローワークでは事業説明会を行い、各部門と受付職員への事業理解を促し、就労に一步踏み出せない層のリファーマにつなげた。</p> <p>また、サポステをハブ機能として10代から20代の若者を個々の状況に合わせ、相模原エリアの各拠点へ積極的につなぎ、若者が居場所を利用してともに学び合う契機となった。昨年度末には、ホームページのリニューアルを行った。今後はサポステの新鮮な情報を随時発信しながら、よりハブ機能としての役割強化を図っていく。</p> <p>実人数：521名 延べ人数：2687人 就職等率：84%</p> |
|----|---|

5. 中野区若者フリースペース事業

田中亮太

委託2年目を迎えた中野区若者フリースペース（愛称：まごころドーナッツ）の2023年度は、若者たちとの様々な実践と、中野というエリアにおける地域と共に取り組む若者支援体制づくりに具体的に取り掛かった年であった。多くの実践を行い内外に目指す方向性を示すことができたが、事業単位、現場レベルでの手応えに留まっている。継続性を持った重層的支援体制をつくっていくために、各所で得られた「点が線となる効果」を真のネットワークにし、プラットフォーム化していくことが求められる。

| 事業部全体 | |
|---|--|
| 事業計画 | 事業実施の成果 |
| <p>まごころドーナッツとしての活動をより充実させていき、これから出会うであろう10代後半や孤立状態の若者たちも意識しながら、中野の若者居場所の在り方を確かなものにする。</p> <p>① 来所する若者たちとの対話と実践を重ねる</p> <p>② 区内の支援機関をはじめ、子ども若者支援団体、当事者グループ、地域との連携の中でしくみを</p> | <p>① 前年度の約2倍の登録者数となり、より多様な利用者層となったことで、活動の広がりが生まれた。メンバー主導のプログラム実施、地域と関わり合うプログラムの増加や、これまでは感染症対策で実施できなかった調理プログラムもスタートするなど、目指している居場所の姿に近づいてきた。</p> <p>不登校、ひきこもり、生活困窮、虐待、精神や知的の障害といった様々な生きづらさを持ったメンバーの他、学生や社会人の登録者もいるのがまごころドーナッツの特徴で、それぞれ利用目的の差異はありながらも人との関わり、いろいろな体験をしたいといったニーズを持っているメンバーがほとんどである。スタッフは彼らとの時間の中で、時には一緒に悩み、時には提案をし、共に活動をつくってきた。そこでメンバーたちは「自分の声が届く」「他者のことを知る」「仲間と力をあわせる」「失敗してもいいんだ」といったことを経験し感じていった。その結果、各メンバーの行動や発言の変化が目に見える成長の証として表れてきている。</p> |

| | |
|--------|--|
| つくっていく | <p>加えて、若者たちの経験の場であり支援の出口でもある地域社会との関わりを日常の中に組み込むことに力を注いだ。近隣で地域活動をしている人々や法人としてつながりのある企業との関係構築を進め、「はたらく大人と出会う会」という交流プログラムや数多くのボランティアプログラムを実施し、社会参加が活動のベースに組み込まれていった。メンバーはそこでの体験を通じて多くを学び、地域や企業の若者理解が深まる効果が生まれた。</p> <p>活動の集大成として、秋には「まごころ祭」、年度末には「中野若者フォーラム」といった主催イベントを実施した。まごころドーナツのメンバーたちに加え、日頃関わってくれている地域の人々にも参加してもらい、地域と取り組む若者支援をテーマにした発信と確認の場となった。</p> <p>② 要保護児童対策地域協議会に加え、今年度中野区に設置された子ども・若者支援地域協議会に参加することとなった。両協議会の会議や研修がまごころドーナツの入っている子ども・若者支援センター内で実施されるため、関係機関の職員たちに現場を見てもらい密な意見交換を行う機会も多く、私たちの声をしくみづくりの中に入れていく手応えが感じられた。</p> <p>中野区若者相談をはじめ多くの支援機関との連携が深まり、入口・出口の増加や各ケースにおける支援体制が強化された。サポステに紐づいた居場所と異なり個別対応に限界があるため、相談機関との連携強化は居場所の活動の安定につながる。また、居場所単独の事業である特徴として、相談を必要としない若者たちとの出会いがある。彼らとの関わりの中で相談ニーズをキャッチすることが度々あり、相談の入口としての役割をまごころドーナツが担っている。「支援対象となかなか出会えない」という若者支援の課題に対して、「ユニバーサルな居場所が入口のひとつになる」ということが見えてきた。このことは支援発展に向けての重要なポイントになると見ている。</p> <p>①でも地域資源の活用について述べたが、多くの地域活動との関りは、若者たちにとってだけでなく地域側にとってもプラスのあるものであること、「地域＝支援者／若者＝被支援者」の関係性にとどまらない「支えあい、社会を共に生きる」両者であることを各現場で確かめてきた。中野という地域の充実度や、法人が多く場所で社会資源との関係性をつくり上げてきたことによるものだろう。しかし、行政や他機関とのやりとりでこれらの視点が確認されることはまだ少なく、各現場での個別支援、対症療法的な支援論が根強い。支援のしくみづくりに最も必要なことは、連携することの意味を広げる実践と発信をしていくことと考えている。</p> <p>実利用者数：49名 延べ利用者数 1268名</p> |
|--------|--|

6. 事務局

廣瀬貴久

昨年度計画に基づき三鷹地域での市民団体とのネットワークづくりを推進した。みたかボランテ

ィアセンターとは無料学習会やひきこもり合同相談会で連携し、再開し始めた子ども食堂ともみたか子育て支援団体コミュニティを通じて交流し、連絡を取り合える関係になっている。またボランティアセンターや多世代交流センターからベーカリー風のすみかの出店要請がくるなど地域の中での協同ネットの認知度を高める1年となった。駅前商店街で昨年1月から週1日営業しているすみカフェも三鷹の様々な市民団体がミーティングやランチで利用していただくようになっている。

| 事業部全体 | |
|--|--|
| 事業計画 | 事業実施の成果 |
| ① 「ぱれっと」事業プロポーザル ② 認定NPO更新作業 ③ 理事会・総会の実施 ④ 全体研修会及び事業別研修会（必要に応じて）の実施 ⑤ コスモ30周年記念イベント ⑥ 「三鷹の子ども事情と子どもたちをサポートする市民活動」（仮称）フォーラム ⑦ サポステ事業及びソーシャルファーム事業監査対応、助成金事業中間監査と報告 ⑧ ボランティア養成講座実施 ⑨ 三鷹ひきこもり合同相談会及び支援者連絡会、三鷹NPO・市民活動フォーラムへの参加 ⑩ 大きく増大してきた予算規模に対して経理事務体制の抜本の見直し等 | ① プロポーザルをサポートし協同ネットが引き続き事業を行うことになった。 ② 相模原学習会での会計処理が適切に行われていないことを指摘され認定更新をすることが出来なかった。1月10日から協同ネットは認証NPOとなっている。総会終了後速やかに再認定手続きを行う予定。 ③ 6/18に理事会・総会、8/24に理事会・臨時総会を実施した。 ④ 7/1居場所研修、10/15、2/22ファシリテータ養成講座、10/21若者協同実践フォーラム、11/11居場所研修第2弾、 ⑤ 2/3コスモOBOGが企画した同窓会に会場を提供した。 ⑥ 7/18三鷹子ども食堂、子どもの居場所等情報交換会参加、12/13みたか子育て支援団体コミュニティ情報交換会参加、2/22みたかボランティアセンター主催の学習支援員養成講座にて講師を行う、2/27みたかボランティアセンター主催の学習支援員養成講座現場見学会を上連雀無料学習会にて実施、上連雀無料学習会をみたかボランティアセンターと外国人支援団体ピナットと協同で毎週火曜日48回開催 ⑦ 6/12、21、12/7、26にて東京労働局及び神奈川労働局の監査に対応、4、7、10、1月にソーシャルファーム報告と監査に対応 ⑧ ⑥にて記載 ⑨ 三鷹ひきこもり支援者連絡会全6回に参加、ひきこもり合同相談会にコスモスタッフも含め全2回参加 ⑩ 認定更新作業に追われると共に常勤スタッフの体調不良もあり次年度に持ち越されることに。当面事務局長が経理事務に関わることを決定した |